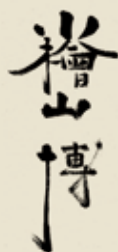
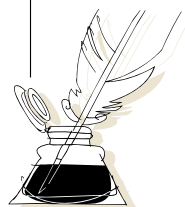


人生讃歌



演劇のこと



娘とその夫になる男性がロンドンで結婚式を挙げるとい
うので行つたら、式のあと『オペラ座の怪人』という演劇
をみるという。俺は英語が駄目だし芝居はわからないからと
断つたが、娘らが「二時間、我慢するつもりで見てほしい」と
言うので仕方なく劇場へ入った。二時間くらい眠っていれば過
ぎてしまうと思った。舞台は午後七時半から始まった。思っ
たとおり退屈で、こんなものを見るならどこかのパブでビール
飲んでたほうがよかつたと溜め息をこらえつつ我慢して見
る。なにしろ相手の言う英語を理解する能力のないばかりが
英語芝居を見るのだから、どだい無理なのだ。



考えてみれば演劇を見るなど、ほんとうに稀だった。大昔、
演劇などというたいそうなものでない、学芸会の劇にかかわ
ったことが一度ある。中学三年のときの文化祭に何のつもり
か、ぼくが短い劇を書いて自分が「隆男」という主役をやり、
町の劇場の舞台で、町民の前で実演したのである。そうなん
たいきさつは忘れたが、ひねくれ者の少年が友達たちによつ
て改心していくという驚くほど単純な筋だったと思う。もう
そのころから目立ちたがりだったのかと思うと、うんざりす

る。高校のころ友達が演劇大会に出るので付き合いで見に行
ったが退屈だった。しかし出演者はみんな下手で、それが面
白かった。



二十三歳から東京で暮らした九年の間に、きっかけは忘れ
たが文学座の舞台を見たことがある。物語の筋の記憶はな
いが、奈良岡朋子の劇場の隅々まで透き通る高い声と加藤武
の重厚な風貌、杉村春子のただ黙って座っているだけなのに周
囲の空気を威圧する貫禄は、客席に座っている多くの肌を波
立たせて伝わってきた、仰天した。



その後しばらく演劇を見ることはなかったが、小説に映画
化の話がくるようになってから演劇関係の人と会うことが
多くなり、舞台を見る機会も増えた。文化座の女優佐々木
愛がぼくの『玩具』を二人芝居でやりたいと言っているころ、彼
女の母親・鈴木光枝の舞台『おりき』を二回見ることになっ
た。それで二応、こっそり辞典で演劇のことを調べてみたりも
したが、俳優が動作と言葉を通して人生や社会の断面を表
現する舞台総合芸術と書かれているだけで、結局は見る者
の感性の力量に左右されそうな感じに思えた。ま、そんな能
力はぼくには無理なことだったが、いつもその場しのぎに、いい
ですねえ、感動しました、と言っていた。

佐々木愛が水上勉作の『越後ついで親不知』を砂防会館
や札幌市教育文化会館で演じたときも見たし、彼女が長崎
で『海の二座』という芝居をしたときは、ぼくが福岡での講演
を終えた直後だったので長崎へ行つて見た。ある日、女優の吉
行和子から電話がきて、札幌で芝居をやるから見に来てと言
われ出掛けた。吉行淳之介さんの妹で文筆家でもあり、以前

いただいた『どこまで演れば気がすむの』という著書で日本エッセイストクラブ賞を受賞した人だった。吉行和子の札幌での芝居は木冬社という劇団の『とりあえずボレロ』で、ぼくは舞台上での彼女の獲物を狙う獣のような眼と、ヒステリックな喚き声に圧倒され、ひどくびくびくした。だが舞台のあと居酒屋で毛蟹をすすめると「うわあ凄^とい。わたしずっと前から毛蟹を二、三人で食べてみたいと思っていたんだあ」とはしゃぐ姿は、もう演技の中に没入していた役者とは別人であった。

このようなあんばいで、ぼくは演劇について全く無知で、いろいろ見せていただいているうちに、役者の魅の動きと言葉を



挿絵/中江潤一

通して描かれる時と空間の中に作品の生命が創られるらしいのを感じたものである。しかしこんなのは的はずれかもしれないなかった。



それでロンドンでの『オペラ座の怪人』である。途中の休憩時間までの四十分くらいの前半の舞台、ぼくはろくに内容がわからず、あとで娘たちに感想を聞かれたときの自分の鑑賞力のなさの弁解を考えながら、ぼんやり見ていた。三十分ほどの休憩が終わって後半がはじまる。しかし前半の筋もわからないまままだから後半もわかるはずはないと思う。

ところが九時半近くから舞台に突然、緊張が生まれる。つまり仮面の怪人が現れてからだ。顔が醜くただれているが美しい女優に惚れた男が、仮面をかぶって女優の恋人を襲い、女優に言い寄る姿は狂気だ。その狂気がぼくに伝わってくるのである。いきなりぼくは物語の中へ引きずり込まれた。彼らの言っていることはほとんどわからないのに、その気持ちや心の動きが伝わってくるのである。

これにはぼくは驚いた。とにかく怪人役の大男の素早い動き、大声での悲嘆や激怒、小声での恋慕や哀訴、嫉妬や絶望の凄絶とも言える迫真さは、ただごとではないのだった。それは演技ではなく、この役者はいま本当にこの女優に命がけで惚れてしまっているのだ、と思ったほどだ。怪人の執念がこの役者に乗り移ったの陶酔状態にあるに違いなかった。

何にしる怪人の顔は仮面で表情が見えないが怪人が感じている苦悶や悲哀、絶望を自分も感じていることの衝撃であった。つまり感動の大きさだった。これにはたまげた。ぼくはこの芝居を見終わってもまだ涙を流し続けたのである。仰天した。

①